

大学初年次の学生に対する日本語語彙力調査の試行

松 浦 年 男

Toshio MATSUURA

目次

1. はじめに
 2. 調査方法
 3. 結果
 4. 考察
 5. 結論
- 付録

[Abstract]

An Analysis of Japanese Vocabulary Test for First-year Students: A Pilot Study

This paper reports the results of a vocabulary test of Japanese words for first-year students of Hokusei Gakuen University. The test evaluates two dimensions of mental lexicon: vocabulary size and usage of antonyms. The results show that estimated vocabulary size of students was around 33,000 words. While the size of each student does not vary according to their affiliations, differences in their entrance examination affect the vocabulary size of each student. On the other hand, the score of usage of antonyms differed in accordance with both their affiliation and entrance examination. Some plans are proposed to improve education of language skill for first-year students.

1. はじめに

初年次教育として日本語母語話者を対象とした日本語表現に関係する科目を設定する大学は多く、その重要性も認知されている。たとえば私学高等教育研究所(2005)による学部長を対象としたアンケート調査では、初年次教育において「レポート・論文の書き方などの文章作法」を重要な項目だと回答した割合は63.7%で、全項目中最上位だった。本学においてもこのような科目は設置されており、2013年度からは「日本語表現I・II」と

して全学必修の科目となった。

本学の場合、シラバスにも「[レポート・論文などの文章技法]の習得を中心的なテーマとする」として、パラグラフや文章構成についての講義と実習を中心とした授業展開を行っている。これはレポート等の作成に関する技術は教授、習得可能な項目であること、専門科目における重要度が高いという経験に基づいている。しかし、これらの技術によるレポート作成において下支えとなるのは語彙力であることは否定できない。文章作成の技術を身につけたところで語彙が貧弱ではレ

キーワード：初年次教育，日本語表現，語彙量，対義語，入試方式

Key words: First-year Education, Japanese Academic Writing, Passive Vocabulary, Antonyms

ポート・論文の完成度は低いものとなる。これは大学のレポートに限らず「ボキャ貧」に代表される流行語としても社会に認知されている問題とも言える⁽¹⁾。ただし、大学生の語彙力が低いという印象を持つ人は少なくないだろうが、筆者にとって、ほとんどの場合個人の印象的な体験に基づく主観的な印象に基づいたものだと感じられることが多いのもまた事実である。

それでは実際のところ、大学初年次の学生の語彙力はどの程度あるのだろうか。それを測る適切なテストはどのようなものだろうか⁽²⁾。本稿ではこのような問題意識のもと、安易な印象論に基づくことなく、実力を客観的な形で把握することを目的とし、初年次の学生を対象として行った語彙量の推定、及び対義語の運用に関する調査を行った結果について報告する。そして、妥当なテストがどのようなものか、また、どのように初年次教育としての日本語科目の運営に反映させることができるかを検討する。

2. 調査方法

2.1. 調査対象

調査対象としたのは共通科目「日本語表現I (2012年度以前の入学生は「文章表現」)」の受講者686名である。本科目は全学必修科目で2013年度は全42クラスで開講されたが、このうち30クラスにおいて2013年4月に同科目授業時間内に調査を実施した。受験者の入学年度の内訳を(1)に示す。

(1) 受験者の入学年度内訳	
2013年度	575名
2012年度	82名
2011年度	17名
2010年度以前	12名

今回の調査は大学初年次における語彙力の

把握を目的としているため、2013年度入学生 (= 1年生) 575名のみを分析対象とする。

2.2. 調査内容と評価法

調査票は語彙量の推定、対義語の運用、論理の把握という3つの大問から構成されている。今回はこのうち語彙量の推定、対義語の運用のみ分析を行う。調査用紙を付録につけているのでそちらも参照されたい。

2.2.1. 語彙量の推定

大問1はNTT語彙推定テストを用いた語彙量を推定する設問である。NTT語彙推定テストとはNTTコミュニケーション科学基礎研究所が作成した語彙量を簡単に推計するテストである。語彙数を計測する方法にはいくつかあるが、たとえば国語辞典の全項目について知っているかを尋ねるといった方法は確実性は高いが手間がかかり合理的とは言い難い。反対に国語辞典からランダムに単語を選択しそれを知ってるかを尋ねる方法も考えられるが、偶然性に左右される可能性が高くテストの信頼性が損なわれる。NTT語彙推定テストはこれらの問題を解決するために単語親密度を使用している。単語親密度とはその単語に対する「なじみ」を測ったもので、親密度が高いほどその単語はよく知られており、低いほど知られていないことになる。NTT語彙推定テストはこの単語親密度の境界を同定することで、その個人の語彙量を推定する仕組みになっている⁽³⁾。NTT語彙推定テストは3種類の異なるテストから構成されており、今回はこのうちテスト1を使用した。語彙量は最低値が0で最高値が67800である。

2.2.2. 対義語の運用

大問2は文を読んだ上で対義語を書かせる設問である。単語が脳内で他の単語との関係に関するネットワークを作っているのは想像

に難くない。特に、レポート・小論文の執筆において対比関係を正確に捉えることが重要だと考え、ここでは対義語の運用に焦点を当てた問題を作成した。

設問の単語は福嶋（2012）にあるリストを使用した。福嶋（2012）は小学生の正答率をもとに抽象度によって4つのレベルを設定している。本調査での項目はこのうちレベル3, 4の対義語を中心にそれを用いた空欄を含む文を作成し、空欄に当てはまる対義語を補充する形式にした。対象となる単語は最初の5問、次の10問、最後の10問と進むに従って抽象度が上がっている。採点は漢字で書いている場合は2点、平仮名で書いた場合は1点にし、誤字も1点として扱っており、50点満点とした。

3. 結果

3.1. 語彙量

基本統計量を（2）に示す。

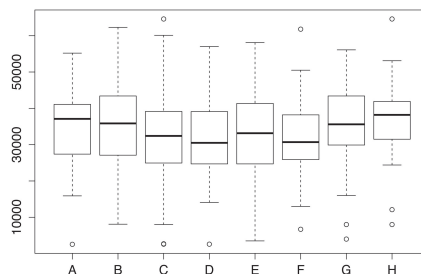
(2) 語彙量の基本統計量（単位：語）

最大値	64600
上位1/4	41100
中央値	33400
上位3/4	25900
最小値	2560
平均値	33611
標準偏差	11166.05

大学単位での語彙量の推計についてはほとんどデータがないためはっきりとしたことは言えないが、平均値、中央値がともに3万3千語程度というのは、大妻女子大学での結果とほぼ同程度（中尾ほか2012）である。

本学は8つの学科で構成されている。語彙量について学科間での比較を行うために箱ひげ図を（3）に示す。

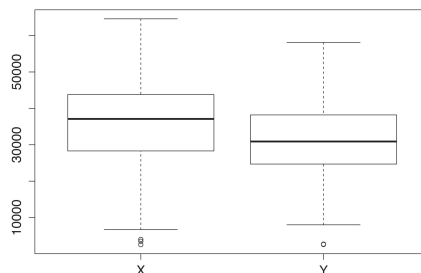
(3) 所属学科による比較



箱ひげ図は上の横線が最上位、箱の上辺が上位1/4、箱の中の横線が中央値、箱の下辺が上位3/4、下の横線が最下位を表しており、外れ値はそれぞれ上と下に丸で書かれている。この図を見る限り学科間の分布に大きな差は読み取れない。

次に入試方式による分析結果を示す。本学には入試方式は2つある。この2つをXとYとして、（4）にその方式による語彙量の推定結果を箱ひげ図で示す⁽⁴⁾。

(4) 入試方式による比較



また、基本統計量を（5）に示す。

(5) 入試方式ごとの語彙量に関する基本統計量

	X	Y
最大値	64600	64600
上位1/4	43800	41100
中央値	37100	33600
上位3/4	28300	25900
最低値	2560	2560
平均値	35601	33700
標準偏差	11470.56	11212.86

XとYの間では上位1/4、中央値、上位3/4、平均値において差が見られる。

3.2. 対義語

基本統計量を (6) に示す。いずれのレベルも20点満点である (レベル1は10点満点で採点し後から2倍にした)。

(6) 対義語の運用に関する基本統計量 (単位: 点)

	レベル1	レベル2	レベル3
最大値	20	20	20
上位1/4	12	14.4	9
中央値	12	13	6
上位3/4	4	10	4
最小値	0	3	0
平均値	10.40	12.40	6.58
標準偏差	4.35	3.26	3.45

表からも分かるように、レベル3で得点が下がっている。レベル1の得点もレベル2に比べて低いが、この原因は不明である。問題

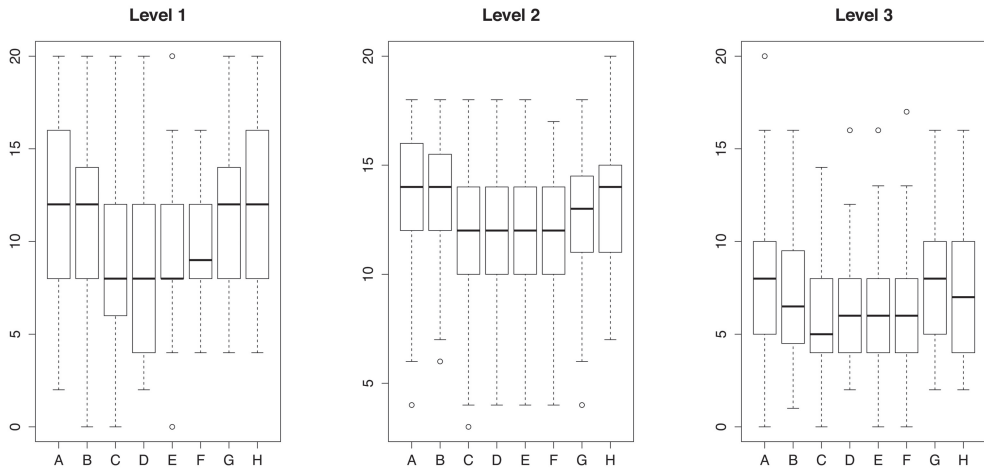


図 1 所属学科による得点分布

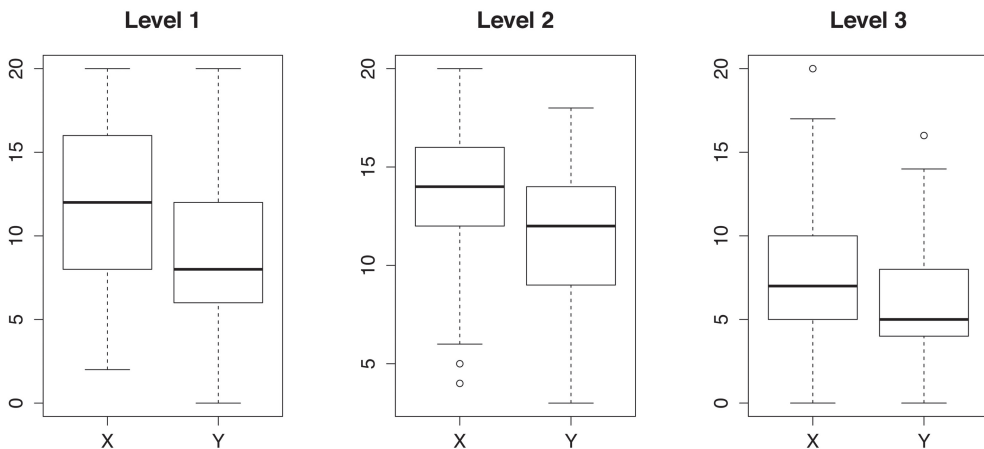


図 2 入試方式による得点分布

の精査が必要であろう。

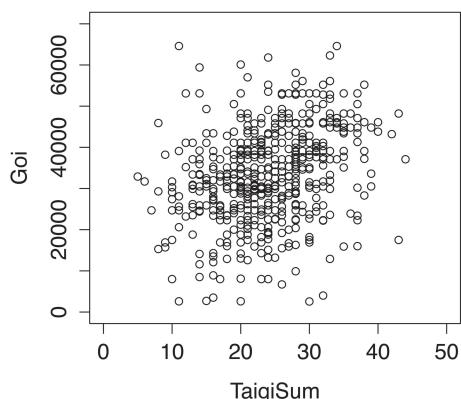
所属学科ごとの得点分布を図1に示す。特に中央値に注目すると、3つのレベルを通じて学科C, D, E, Fが他の4つの学科に比べて低くなる傾向が見られる。レベル1がレベル2より顕著に低いというのもこの4つの学科の特徴である。

次に、入試方式ごとの対義語の得点の分布を図2に示す。どのレベルでも方式Xが方式Yよりも高い得点も分布していることが分かる。

3.3. 相関

2つの項目の得点間に相関があるかを見てみよう。(7)に散布図を示す。X軸が対義語の合計得点(50点満点)で、Y軸が語彙量である。

(7) 語彙量と対義語運用の相関



この2つの相関係数は.3055であった。

4. 考察

4.1. 全学共通科目を担当する上で有用な情報

以上の調査結果が全学共通科目の運営に対して持つ意味合いを考察する。現在、本学の日本語表現科目では学生は基本的に所属学部によってクラスの配属の希望を出し、抽選によって配属クラスが決まるが、その結果とし

てどちらか一方の入試方式の学生が偏っていることもあり得る。調査結果では、学生の入試方式によって語彙量、対義語の運用の両方において差が見られたことから、担当講師としては学生がどの入試方式で入学しているかを知っておくことは有益なことだろう。もちろん、ある方式で入学したからと言ってその学生の能力が一意に決まるものではないことから、ある個人がどの方式で入学したかという情報が有用というよりも、たとえばクラスの中での大局的分布については把握できるようにしておくことが望ましいだろう。

学科間では学生の学力も異なっているという印象が強い。そのため、クラスを学科によって編成し、学科の特性に合わせた指導をした方が良いという意見が述べられることもある。今回の調査結果では対義語の運用については学科間で違いが見られたことからそのようなクラス編成を行うことの有用性を裏付けているとも言えるかもしれないが、今回の調査結果と、たとえば教員がそれぞれの学科の学生に対して持つ印象が一致するのかは分からないため、この点については保留すべきだろう。

4.2. 日本語力調査としての妥当性

今回の結果から、語彙量と対義語の運用の間には乖離があることを指摘しないといけないだろう。語彙量の推定は「知っているか」を自己申告したものであるため、個人によって「知っている」の定義が異なることが考えられるし、そもそも本当にその単語を「知っている」と言えるか怪しいものも含まれる(中尾ほか2012)。一方、対義語の運用は正答・不正答がはっきりするため、その点では精度が高くなる。ただし、客観的な指標がないため、どの程度の得点ならどの程度のことが期待できるのかを読み取ることができない。3.3節でも示したように、この2つの得点の間に強い相関は見られないことも、この2つが別

の能力を測っていることを物語っていると言える。調査の手軽さと精度は相反することはよく起こる問題ではあるが、より妥当な調査方法を追求する必要があるとも言える。

この調査では語彙力という日本語の一側面に焦点を当てて検討を行っている。日本語力と言ったときそれが何を指すかは非常に広範囲にわたる問題である。日本語力を測る検定試験ひとつ取ってみても日本語検定(日本語検定委員会)、語彙・読解力検定(朝日新聞・ベネッセコーポレーション)、文章読解・作成能力検定(日本漢字能力検定協会)、作文検定(現代用語検定協会)、国語力検定(Z会)など様々あり、そこで測る能力も多岐にわたる。たとえば、日本語検定の出題範囲は敬語、文法、語彙、言葉の意味、表記、漢字と広範囲にわたる。また、本学では大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」の一環として新入学生の基礎力調査を全学で行っている(中嶋ほか2013)。そこに含まれる日本語の試験も、漢字や語彙をはじめ文法や四字熟語など広範囲に渡っている。それらの結果と今回の調査結果を合わせることによって、学生の日本語力についてより詳細な結果が得られるだろうし、テストそのものの効率化や改良にもつなげることができると考えられる。

4.3. 日本語語彙力向上のために何ができるか

調査の目的のひとつに、効果的な日本語科目のカリキュラム・シラバスの作成、及び、科目の枠を超えた学生の日本語力向上のための基礎資料を作るということもある。今回の調査の結果を踏まえてどのような対策を講じることができるだろうか。

大問1で見た語彙量は、分野が多岐にわたるが効くと考えられることが多い。それらは経験則に基づいている意見であるし、筆者としてもほぼ同意するところである。しかし、

どのような読書をどれくらい経験することによって語彙力の十分な増強が実現するのかが実証的に検討することは難しく、また、そのような語彙力の増強が専門科目の理解においてどの程度有用であるのかを明らかにすることもまた難しい。

1つの可能性として授業科目の課外活動として読書を課すことも考えられる。筆者は2014年度における授業の実践として、読書課題を課してこれを実現しているが、どの程度有効であったかを計測してはいないため、成果の報告については稿を改める。いずれにせよ、入試方式によって語彙量に差がある以上、一般的にはそれを入学前や入学後の早い段階で補うようにする必要もあるし、専門科目を運営するときにもそれを前提に補習を行うなり、より丁寧な導入を行っていく必要があるのは言うまでもない。

大問2の対義語の運用については、今回の調査の範囲にあるような語彙ならば福嶋(2012)にあるような既存の問題集によって明示的に補強することも可能である。福嶋(2012)は小学生用の問題集とあるが、実際に中学生・高校生に対する教育においても有効だとしているし(同書p.7)、実際今回の調査でもレベル3の正答率が低かったことを考えると、大学入学前または入学後の初期にこれらの対義語について学習する機会を作ることは有効だろう。

5. 結論

本稿では大学初年次を対象に行った日本語の語彙力に関する調査結果について報告した。調査によって得られた結果をまとめよう。まず、語彙量の推定では学生の所属学科による違いは特に見られなかった。一方、入試方式による違いが見られた。次に、対義語の運用では学生の所属学科、入試方式ともに違いが見られた。また、2つの調査項目の間で強

い相関は見られなかった。

大学初年次の学生の日本語語彙力を測る上でより妥当な調査項目について探究していくことはもちろん重要である。たとえば百羅漢(近藤・天野1998, 2013)など認知能力との関連性が指摘されている調査法などを併せることによって、学生の日本語語彙力を多面的に測ることは可能だろう。しかし、それを実際の教育に適切に反映させるためには専門科目のカリキュラムにおいて何が必要な日本語能力かを明示することが必要である。それなしに「日本語力の向上」を謳っても、効果的な結果が得られることは期待できない。

また、今回のような入学初期の調査に加え、1年次の終わりなどに追跡調査を行うことによって、大学生の語彙力がどの程度向上するのか、そこにどのような要因が関与するのかなどを明らかにすることができる。筆者は2014年度も同種の調査を実施しており、年度末に第2回の調査を実施する計画である。その調査結果の報告も含めて大学初年次における語彙力強化の方策について検討を重ねていきたい。

〔謝辞〕

調査にあたり協力いただいた木谷満、高木維、高島猛、高橋啓太、田代早矢人、永山ゆかり、成田大典、及び草稿にコメントをいただいた岡田一祐、佐藤文子の各氏(敬称略)、に感謝します。また、本稿の一部は平成25年度文学部リトリートにおいて「入試方式と学力：日本語力調査をもとに」と題して行った発表に基づいています。当日質問・コメントを頂いた方々に感謝申し上げます。なお、本研究は平成25年度北星学園大学特定研究費「評価テストを活用した初年次教育プログラムの改善のための基礎的検討」(研究代表者：金子大輔)より助成を受けています。

〔注〕

- (1) もっとも「ボキャ貧」そのものは大学生に限って使われていたわけではないことに注意する必要がある。
- (2) 漢検や語彙・読解力検定のような語彙力の比重が高い外部試験もあるが、受験のコスト(金額的のみならず時間的なものも含む)を考えると、全学で行うには現実的な選択肢とは言えない。
- (3) 詳しい解説は語彙推定テストのサイト中の解説 <http://www.keclntt.co.jp/icl/lirg/resources/goitokusei/intro.html> を参照されたい。
- (4) 入試方式による入学者数の内訳は公開事項でないため具体的な人数は記さない。

〔参考文献〕

- 近藤 公久, 天野 成昭 (1998) 「漢字単語の読み能力テスト: 単語親密度を利用した言語能力の推定法」『日本心理学会第62回大会発表論文集』p.711.
- 近藤 公久, 天野 成昭 (2013) 『百羅漢 ～実験参加者の言語能力差の統制のための漢字テスト』日本認知科学会テクニカルレポート69 (<http://www.jcss.gr.jp/technicalreport/TR69.pdf>).
- 私学高等教育研究所 (2005) 『私立大学における一年次教育の実際』私学高等教育研究叢書4.
- 中尾 桂子, 柴田 実, 中谷 由郁, 平林 一利 (2012) 「『文章表現』指導内容再考のための一考察: 学生の語彙量, 記述上の形式的規則に見られる問題点の観察をもとに」『大妻女子大学紀要一文系一』44, pp.108-92 (左).
- 中嶋 輝明, 片岡 徹, 松浦 年男, 金子 大輔, 野原 克仁 (2013) 「全学を対象とした入学時基礎力調査の試行的実施」『リメディアル教育学会第9回全国大会発表予稿集』pp.8-9.
- 福嶋 隆史 (2012) 『ふくしま式「本当の語彙力」が身につく問題集 [小学生版]』大和出版.

付録

調査項目1：語彙力の推定

知ってる（おおよその意味が分かる）単語の番号を○で囲みましょう。

1. チャンピオン
2. 祝日
3. 爆発
4. ライン
5. さつま芋
6. 毒ガス
7. 枝豆
8. 過ごす
9. 朝風呂
10. そもそも
11. 見極める
12. あべこべ
13. 本題
14. エンゲル係数
15. 泊まり込む
16. 預け入れる
17. 言い直す
18. たしなみ
19. 英文学
20. はまり役
21. ごろ合わせ
22. 労力
23. 忍ばせる
24. 勃発
25. 宿無し
26. 目白押し
27. 請負い
28. 塗り箸
29. 気丈さ
30. 茶番
31. 大腿骨
32. 術中
33. 泌尿器
34. 血税
35. 悶着
36. 腰元
37. 裾模様
38. 旗竿
39. かんじき
40. 百葉箱
41. 迂曲
42. 告諭
43. 辻番
44. ライニング

45. 輪タク
46. 懸軍
47. 陣鐘
48. 泥濘
49. パララックス
50. 頑冥不靈

調査項目2：対義語の運用

空欄に下線を引いた語の対義語を埋めましょう。

書けるものは漢字で書いてください。

B-1

1. 社長は報道内容を否定していたが、社員はおおむね（ ）していた。
2. 高校までの授業は（ ）の事柄を習うが、大学の授業は未知の事柄を扱う。
3. 若い人は食事で（ ）より量を優先する。
4. 大切なのは自己の判断より（ ）による働きかけだ。
5. （ ）的に見ていて分からないことでも全体的に見渡すと分かることがある。

B-2

6. 失敗は（ ）で起こるもので偶然に起こるものではない。
7. 主張は客観的な証拠に基づくべきで、（ ）的な印象は必要ない。
8. 新商品は流行したが（ ）が消費に追いつかず収益は高くなかった。
9. 巨大台風では直接的な被害は少なかったが（ ）的な影響は甚大だった。
10. ヒーローショーの対象は子供が主であって大人は（ ）にすぎない。
11. 外国語の発音には容易なものもあるが、（ ）なものもある。
12. 劣等感にさいなまれてきた人ほど、きっかけがあると（ ）感にひたる。
13. 失敗の原因はいろいろ考えられるが、まずは（ ）を受け止めるべきだ。
14. 私的な意見と（ ）的な見解は分けるべきだ。
15. 今後の見通しについてほとんどが楽観的だが、（ ）的な人もいる。

B-3

16. 授業形態を見ると、講義は一方向だが演習は（ ）であることが多い。
17. 論理というのは真か（ ）かの2つしかない。
18. 重要な物事の決定は感情ではなく（ ）によって行うべきだ。
19. 真の独創は常に（ ）から生まれる。
20. 交通事故の影響は身体的なものより（ ）的なものの方が長引く。
21. この停電は何らかの故意によるものではない。

く（ ）によるものだった。

22. 学問を志す者は謙虚さが大切であって（ ）になってはいけない。
23. もめ事は（ ）で話し合うのも大切だが、第三者の意見も聞くべきだ。
24. 宗教における空闊的な広がり背後には（ ）的な深さが含まれている。
25. 正義とは絶対的なものではなく、（ ）的な基準によって決まる。

